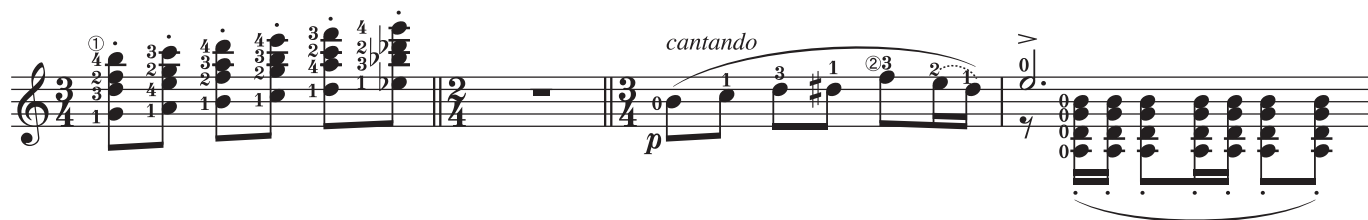
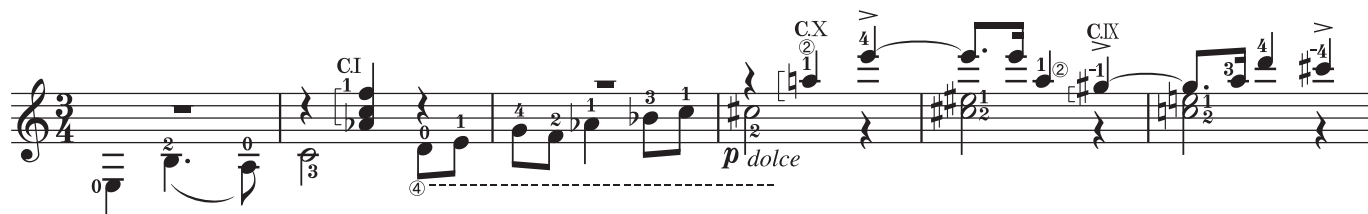


休符の原則 その2

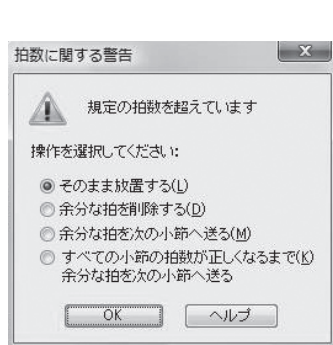
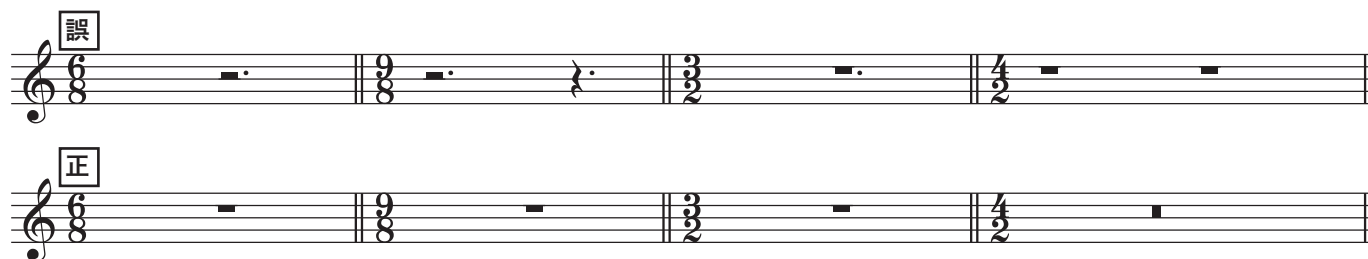


今回の譜例はギター独奏曲の一部です。2小節目に全休符が有りますが、これが全休符というものの特殊性と言うか、もう少し具体的に言うと2面性を示すものです。この小節は2/4拍子ですから、全小節分の休止でも二分休符一個となりそうなものです。また、そう書いても必ずしも間違いとは言えませんが、現実には全休符を用いる例が圧倒的に多くの出版譜に見られます。全休符は全音符に対応したものですから、その音価は四分音符四つ分と定義付けられますが、一方では「全」という文字通りに、拍子の如何を問わずに小節全体の休止符としても広く用いられています。

下の譜例もギター独奏曲の一部ですが、二声部を明確に示す為に1小節目と3小節目の上声部に休符が入っています。この部分を単声部で表すことも可能で、私ならそうしますが、二声の流れを視覚的にも明白にするという意味で、一般にこのような書法が好まれるようです。そして、ここでも拍子に合致した付点二分休符ではなく、全休符が適用されることが多いようです。



下の譜は様々な拍子での休符の用例です。上の五線では各小節の総音価に正確に対応した休符が入っていますが、おそらくは音楽史上初めて楽譜についての詳細な解説本を著したテッド・ロス氏は、それを誤りであると断言しています。音価というものに関わらず、1小節全体に適用される休符は全休符であるべきだとの見解です。ただし、この規則にも例外があり、最後の4/2拍子の場合には2倍全休符を用いるべきもので、Finaleの記譜用フォントにも装備されています。とはいえ、これは主として古楽の楽譜等に散見されるもので、今はもうあまり用いられない拍子記号です。原典がそうであっても4/4拍子に書き換えて出版されることもあります。心理的な印象はともかく、演奏上でそれが問題にはならないだろうと思います。



Finaleは全休符に特別な機能を付加しており、デフォルト・ファイルは既に各小節に全休符が入力された状態に見えます。これは音符情報として有るのではなく、「未入力の小節には全休符を表示する」という機能を「五線の属性」が持つことによって現れるものです。これをオフにすれば全部消えますが、普通はそうはしないでしょう。特に全休符の多いアンサンブルのスコア等で重宝するもので、拍子を変えても消えませんから、その特殊性にも配慮したものとと言えます。

それは良いのですが、困るのは或る声部だけに全休符を入れる時で、拍子が3/4や6/8だったりすると左のような警告に煩わされます。入力ミスを防ぐためには非常に有効な機能ですからオフにはしたくないところで、実に悩ましいものですが、先のバージョンでの改善に期待するしかありません。